

「神とともにあること」

を学び続けて…

山崎 美貴子

20世紀における地球上の私たちの生活は戦争などの暴力に支配され、多くの人々の命が其の犠牲となってしまうことが絶えることなく続きました。

「どうか、平和の主ご自身が、いついかなる場合にも、あなたがたに平和をお与えくださるように。」(テサロニケの信徒への手紙二 3. 16)とパウロは祈り続けたように、長い時代を経て、21世紀初頭に入っても、相変わらず、戦争が継続し、パウロの祈りに合わせて、祈らずにおれないような想いになります。

何よりも貴ばれなければならないのは人の命の尊厳でありましょう。その命が一度に、しかも大量に奪われてしまう原因となるのが戦争です。国と国との利害の対立によって生じる戦争の犠牲を強いられるのは弱い子どもたち、女性達であることは間違いのない事実でしょう。

その国が平和である時代状況で生活をしているときは平和のありがたさを当たり前として受けとめ、他の国の子どもたちや高齢者等が戦火によって、痛ましい死を遂げていたり、親やきょうだい、親族が散り散りになり、家や家財、国を奪われ、難民として暮らす人々のことに想いが至らないことは少なくないのではないのでしょうか。

今、この日本で暮らしている私たちの日常はかつてのように戦火に見舞われる日々ではなく、一見、平和そのものである為に、国を追われたり、目の前で大量に人が殺戮を繰り返している姿に触れることがない為に、実感を持ってそうした事態を理解し、受け止める

事ができないのは当然のことかもしれません。

去年は国連が定めたボランティア国際年でした。国連に対して2002年を「ボランティア国際年」と定めることを提案したのは日本でした。日本が提案国となった理由は一人の大学生が大学4年次、卒業を控えていたときにカンボジアで国連の監視下によって国政選挙を行うこととなり、志願して国連のボランティアとして現地で働くことを決意したのでした。それまで、圧政により、国内で大量の殺戮が繰り返されていたのですが、その事態に終止符を打ち、平和を取り戻すための努力が開始され、その青年はその支援のために現地に滞在していたのですが、残念ながら、テロの銃弾により若い命を失ってしまいました。その彼の死を無駄にしないために、その青年のお父さんが日本政府に対して、国連にボランティア国際年を設定するように働きかけました。その結果、世界104カ国の賛同を得て、国連により、「ボランティア国際年」の活動が世界各地で進められ、この地球上の105カ国の活動報告が国連でなされました。我が国でも全国各地で百万枚を超える、平和を願うメッセージカードが書かれ、様々なアクションプランが展開されました。

平和を願う人々がこの地球上にたくさんいるのに、人間の心貧しさによる争いは絶えることなく続くのでしょうか。

「神はまた、人の心に永遠の想いを与えられた。しかし、人は神の行われるみわざを初めから終わりまで見極めることはできない」とあるように神様は途切れることなく、終わることのない永遠の想いを与えてくださっているのに、私たち人間は神様がなさっている大きなみわざを見極めることさえできないままに、争いや人への憎しみをぶつけ合っている事を率直に認めないわけにはいかないのです。

これから、明治学院大学を卒業してゆく学生のひとりひとりが、自分自身を顧みて、神様を仰ぎ、祈り、「神とともにあること」を心から信じて卒業してほしいと願っています。

神は時間を超えて共にいてくださる存在であることを胸に刻んで、神とともに歩む事ができる学生たちであることを心から念じています。

(やまざき みきこ 所員・社会学部教授)